

「Extended (or Cambodian) Mahāvamsa」 訳註 (二)

福田孝雄

かのランカー (Lanka) には夜叉の群が住しており、またかれ等総ては教法の真理の理解を妨げると、世尊は知り給い「それ故わたしはかれ等を駆逐して、ここなるギリデーパ (Giridipa) に住せしめるべきである。しかし今は (そこに) 行き、(そのことを) なす時機ではない。これより九か月後の⁽²⁾ プッサ (Phussa) 月の満月の日こそ、その時機である。(かれ等は) 樹や花や果実によって莊嚴された心地良いマハーナーガ (Mahānāga) の森の庭園で、集会をなすであろう。(わたしは) そこに行き、かの集会に神変を示し、このギリデーパを神通によって運んでおき、そこに夜叉達を瞬時に追放し、相応しき止処ランカーに教法を行うであろう。ランカー島が、わたしによって空無になった時、これより第五の年に、そこに住む陸生、水生のかの竜達に大諍論が起るであろう。わたしはチッタ (Citta) 月の満月の時に、そこに行き、かれ等の諍論と恐怖を終息せしめ、かつ竜達を三帰に確立せしめるために行く

であろう。わが悟りより第八年目のウェーサーカ (Vesākha) 月の満月の日に、わたしは摩尼の眼の竜により招かれ、摂受をなしつつそのかれ等のところに行き、かの夫々の止住すべきところの界において、等至に到達し、かの島を慈と禅によって遍満させ、住せる毒竜の群の罪垢と猛毒とはげしき忿怒と、夜叉群の龜惡と粗暴の、不畏と安穩の障碍をば空虚にして、刹那のかの等しき慈の浄化によって、教法を光明の価値のあるものとなすであろう」と洞見し給うた。「何時人々の住居がここに存するようになるか、わが教法が何時ここに確立するであろうか」と、それより守護者は觀察しつつ、直ちに洞見し給うに、「これより四十五年が過ぎたヴェーサカ月の満月の日、わたしがサーラ双樹の間の、完全なる涅槃の床に臥している時、ランカーに人々の住居が存するようになるであろう。かのマハーカッサパ (Mahākassapa) 長老は(わが涅槃の) 直後に、かの六神通の大神変を有する五百人のア

ラカン (arahant) 達を選定して、第四月目の時に、五百人の長老達によって、第一結集 (Paṭhamasaṅgīti) と称する結集が行われるであろう。その後一百年が経過して、ヴェーサーリ (Vesālī) のヴァッジー (Vajjī) 族の子等である比丘達²⁰⁴が、かの十事 (dasavatthu) と称する事柄を僧伽の中において説きつつあった。バラモンのカーカンドカ (Kākāṇḍaka) の子であるヤサ (Yasa) と称する一長老が、七百人の勝れた漏尽者達を選定し、レーヴァタ (Revata) その他の大長老達と共に集合して、教法の中に十事が起ったために、第二結集 (Dutiyasaṅgīti) と称する結集を行うであろう。それより一百年が経過して、第十八年目にヴィンドサーラ (Vindusāra) の息子として生まれた、ダンマソーカ (Dhammasoka) と称する最上の王が存在した。その時、智慧を具え、六神通の大神変を有するモツガリプッタティッサ (Moggaliputtatissa) という高名な一人の長老は、ちょうど類似した種類の雑草が穀物を駄目にしてしまうように、六万人の数の修行者の装いをした者達が教法を破壊していたが、かれ等外道の説を智慧によって破壊し、教法の光明を取り戻すために、第三結集 (Tatīyasaṅgīti) と称する結集を行うであろう。その直後に、ダンマソーカ王の息子で、モツガリプッタティッサの弟子で博聞の、漏尽者であり大智慧を有する大マヒンダ (Mahāmahinda) と呼ばれる四万八千の法蘊の彼岸に到れ

る人は、師と僧伽によって命令され、かの神通によって行き、このランカーに教法を確立せしめるであろう」と。かの時、世尊は菩提道場に住して、入定の中においてかの総てのブツダの務めと教法の確立についての決定をなしつつ、最上者は菩提道場において等至に入ることによって、七七日間の時を過し、第八の七日に至って「わたしはこれよりバーラーナシー (Bārāṇasī) に行き、最上の法輪を転すべきである。²¹⁹この世間は多分、日々かの明の暗黒と空虚とによって征服されるであろう。最上のは得がたき故に、ブツダが世に出でたのだ」と思惟し給うた。「この世間にはブラフマン(梵天)に対する尊信があり、そのためにブラフマンのみが重視されており、正法は軽んぜられる。更にまたその時、梵天サハンパティ (Sahampati) が、最上の法を乞うてわたしに近づき『今守護者は、默然(を思い)説法(しようとは欲しておられない)』と。またこの世間の人々は『このわれ等の父であり、そしてわれ等の師でもある大梵天が来たりて、この大地に法輪をつけて合掌をなし、説法を乞う。日々われ等が恭敬すべきもの、奉仕すべきもの、重んじるべきもの、供養すべきものは、正にこの師の正法である』と思惟する。もしこの世間が、自らの利益のために、正法を重んじ、正法を尊信し、正法を聞かんと欲し、喜びをなすことが可能であるならば、まずここより行きてアジャパーラニグローダ (Ajāpālanig-

rodhaka) に近づき、そこで梵天によって懇願されて、わたしは最上の法を説くことを約束(するであろう)。わたしはカース市(Kāśipura)に行き、最上の法輪を彼等大梵天のために転ずるであろう」と思念し給うた。それより努力を伴う総ての仏の務めをなしつつ、かのアジャパーラと呼ばれるニグロードの方²³¹に近づき、その刹那に近づき了って、そこに跣踏して坐され、甚深なる法の省察により、衆生の利益のために默然の状態に勝者は到った。梵天²³³サハンパティは一万の大梵天衆の眷属と共に行って、最勝の如来に説法を乞うた。かの仏眼によって世間を觀察されて、「まず最初にわたしは誰に説法をなすべきであろうか」と思念して、その時梵天の覬請に同意された。「誰が速やかに法を理解するであろうか」と世尊は觀察しつつ、アーラーラとウツダカの二人の苦行者達の死んでしまったことを知り、コーンダンニヤ(Koṇḍañña)を初めとする五群の比丘達の、多くの資助のあったことを刹那に憶念して、「かの五群比丘達は、何処に住しているであろうか」と天眼により遍求して、刹那にカース市のイシパタナミガダーヤ(Isipatanamigadāya)に(いる)と知り給うた。世尊は夜が明けるや、衣鉢を携えて、ウルヴェーラセーナニ(Uruvelasēṇi)村の方角に向って歩まれ、次第行乞によって食事を取り、(十八)由旬を旅して真直ぐにそこに向われた。カーシプラと呼ばれる都城に、十八(由旬)を

[Extended (or Cambodian) Mahāvamsa] 訳註(福田)

行かんとした世尊は、古の諸仏達の如く空中を歩き、ミガダーヤ(Migadāya 鹿野苑)に降りて最上の法を説こうとしたが、アージーヴィカ(Ajivika)のウパカ(Upaka)と呼ばれるものの機根の到達を、如来は觀察しつつ「もしわたしが空中を行けば、ウパカは(わたしを)見ない。しかしわたしが地上を行けば、かれはわたしを見て、わたしと対話を行った後、出家するであろう。従ってわたしが神通力によって、空中を行くのは如何であろう。今日(徒歩で)行って、わが身に危難が降り懸かるなら降り懸かれ、兩足²⁴⁷が疲労するならしてもよい。世間を利益するために、わたしによって正にかの総ての波羅蜜が究められ、且つ、満たされたのである」と立ち上がって、そこよりバーラーナシーへと向って歩み給うたのである。

(それに従って)青や黄や赤や茜色や白などの六種の総ての光線が放出し、彩なして光を放ち、閃光の如くに輝やき、世間に向って仏陀の出現したことを布告するかのようであった。大地も森林も、総ての木々や大樹なども六種の綿布に覆い尽された如くになり、世尊は緩やかに出発し給うた。鳥道を雛を捜しつつ行く鳥達も、吉祥にして優美、且つ、威光を有して密林中を歩きつつある人牛王を認めて、空中に刻まれた如く空中にとどまり、樹木の類は恭敬をなしつつ、ひれ伏して芳香ある花粉を振り撒いて、守護者の行き給うことを遍

く思うのである。

かの行者ウパカは、(世尊の) ガヤー (Gaya) と大菩提樹との間の途上を進まれるのを見、且つ、密林中で諸方に六種の光線の網が発散し、世尊の(放つ) 光線の自らの(身体)に触れるのを見て「何故わたしにこのようなものが生じたのか。かつてこのようなものが生じたのを見たか。かつてこのようなものを見たのを見たか、今わたしの(身体)に見られる。これは一体どうしたことか。これは水なのだろうか。もし水であるなら、こ(の身体)は濡れない筈はない。わたしの(身体)は一体どうなっているだろうか。おお、今わたしの身体は、まったく濡れていない。それともこの輝ける網は火であるのだろうか。もし火が燃えているのであれば、何故身体が焼かれないのだろうか。あゝこれは熱せられた網ではない。一体これはどうしたことか」とあれこれ考察していたが、来つつある人牛王の堅実にして優美であり、一尋の後光に包まれた輝ける容姿は、頭は幢幡と華鬘に覆われ、かの六種の光線によって飾られた清浄にしてまた、黄金により飾られた姿と、黄金により荘嚴された宝の衣服と頭髮堅立し、千の輝きを発したユガンダラ (Yugandhara) と呼ばれる竜を伴い清浄にして美わしき世間の導師を見た。「密林(中)を遊行して輝けるものは、一体誰なのか。人間かそれとも天なのだろうか。もし天が此界に来たのなら、赤き美布と鉢とを持っているが、そのような様子でもな

い。一体これは、どういうことであろうか。もしこれが人間であるなら、容姿は優美であり、且つ、極めて勝れた大神変を有しているであろう。わたしがかれを見た時、わたしの内に大いなる喜びが生じ、身毛堅立し、頭は傘蓋の如くなるであろう。無知なるウパカに、その時敬重の念が生じた。かれは「友よ、(諸根は) 清浄なり」等の言葉を、(ガヤーと菩提樹との間の) 途上にある世尊に言った。八種の音色を具えた声を発しつつ、人牛王は「われは一切勝者にして、一切知者なり」等の偈を説き給うた。世間の導師の言葉を聞いて、ウパカはその時「友よ、或は然うであろう」と言って、密林に出発した。世尊は夕方に発って、次第に遊行して、アーサールハ月の満月の日に、インパタナミガダーヤの五群比丘の住する処に到り、不適當なる言葉によって五群比丘達が話しかけた時、自らの言葉を勸説し、アンニャータコーンダニャを初めとする者達に、最高の甘露を飲ませ、インパタナにおいて、一億八千万のブラフマン達のために、法輪を転じ給うた。来集のかれ等天達の中で法を領解する者の数は、数うべからざるものであった。あらゆる種類の希有なることをば起したので、大いなる感歎の音が天空に鳴り響き、時にあらざるに、雷光が諸方に閃いて、八万四千由旬の山の自在者は、仏の方角に身を屈して「善き哉」との叫びを上げた。かく一万世界もまた振動した。これ等の大地は四那由多を超

え、この水の厚さは二十万由旬であるが、動揺し、鳴り、水は振動した。アーサール⁽¹²⁾八月の満月の日に、アンニャータコ⁽¹³⁾インダンニャ長老は、預流果に達した。白月の最初の日に、ヴァッパ (Vappa) 長老は同様 (の境地) に到り、第二の日には、マハーナーマ (Mahanāma) と呼ばれる長老が同様 (の境地に到った)。第三の日には、アッサジ (Assaji) と呼ばれる長老が (その境地に) 達し、第四の日には、かのバツディヤ (Bhaddiya) 長老もかくの如き (境地に) 到った。悲に勝れたる世尊は、直ちに総ての比丘達に無我相経 (Anat-talakkhanasutta) を説き給ひ、自分の第五日にかれ等は阿羅漢果に達した。またその日に、師はヤサ (Yasa) と呼ばれる良家の息子の到達の機根を見て、夜分に権勢を厭離して、家より出離した時「来たれヤサよ」と言つて、来たれ比丘の出家 (法) により出家せしめ、その夜に、最高の預流果に到達させ、その翌日にはかのヤサを阿羅漢果に達せしめ給うたのである。他にスバーフ (Subāhu)、ヴィマラ (Vimala)、プンナジ (Punnaji)、ガヴァンパティ (Gavampati) 等のかれの朋友五十四人をも、直ちに来たれ比丘よの出家 (法) によつて出家させて、牟尼なる最上者は、かれ等を阿羅漢果に達せしめ給うた。かくして世に六十一人の阿羅漢が出来た時、か (の世尊) は漏尽者達と共に、雨安居を過ぎされて、自然を行ひ「比丘等よ、この遊行を遊行せよ、汝等は二人揃つて

同じ道を行つてはならない」と (四方に) 派遣し給うた。か (の世尊) はかれ等六十人の比丘達を、夫々の地方に遣わし、自らは衣鉢を携えてウルヴェーラに赴き給うた。行路のカッパ⁽¹⁴⁾ーサ (Kappāsa) の密林中で、バツディヤ (Bhaddiya) を初めとするコーサラ王の異母兄弟の三十人の青年達を教導し、かれ等の中最低の者は預流果に到り、最高の者はその日に、総て不還果に達した。来たれ比丘よの方法によりて出家せしめ、また (かれ等を) 各方面に派遣して、次第に (遊行して) ウルヴェーラに到達せられたのである。か (の世尊) は、砂の中洲のウルヴェーラカッサパ (Uruvelakassapa) の庵に住している毒竜を調伏して、三千五百の神変を示し給うた。かくの如く (世尊は) 庵に至り、カッサパに此の如く言われた。「カッサパよ、もし汝に差支えがなければ、わたしはここの汝の火堂に今日の一夜を過すであろう」と。主の言葉を聞いて、喜ばざるために、汚れた傲慢なる者は、沙門にかく告げた。「大沙門よ、わたしは一向に差支えはありませんが、この庵には暴悪で神変を有する毒蛇の竜王がおり、あなたを害するであります」と二たび三たび言った。「(かれは) わたしを害すことはないであろう。その根拠を思念すべきでない。カッサパよ、汝は (わたしが) 火堂に一夜を過すことを、承諾しなさい。汝は (承諾を) 与えなさい。迷執を持つてはいけない」。主の言を聞いて、(カッサパは) かく告げ

た。「大沙門よ、意のままに火堂に住しなさい」と。時に、世尊にして守護者、大悲に勝れたるお人は、火堂に入り、草の敷具に坐し給うた。守護者の(堂に)入るのを見て、かの竜は苦しみ、悲しんで、あたり煙を吐いた。世尊は直ちに、神変によって準備を行い、同じようにあたりに煙を吐き給うた。悪意を持たざるかの人は、その瞬間火の光に輝き給うた。守護者は火界三昧に入り、輝やいた。光明を放ったために、この火堂は燃えたるが如く火を出し光明を放った。時にかれ等結髪外道達は、火堂を囲繞して、「あゝ此処に來たりたる端正なる沙門は、竜により害されるであろう。如何に破滅したであろう」と言った。時に世尊はその夜を過してから、(その竜の)表皮も肉も皮膚も髓も骨髄も(損うことなく)、威力をもって威力を終熄せしめ、(竜を)鉢に入れて明け方に至った時、結髪外道(ウルヴェーラカッサパ)に示し給うた。時にカッサパはかくの如く思惟した。「この沙門は大神変、威神力を有し光り輝いている。しかしわたしが阿羅漢であるようには、まだなっていない」。ネーランジャラー岸で、世尊は結髪外道(ウルヴェーラカッサパ)に言われるに、「カッサパよ、もし汝に差支えがなければ、わたしは、この一日を汝の火堂で過そうと思う」と。世尊は以上に言われたような方法で、(カッサパの)言葉を拒んで「さあ、汝は承諾しなさい。(竜はわたしを)害することはない」と言

われた。苦行者によって許されたので、畏怖することなく(世尊は火堂に)入って行かれた。かの毒竜は仙者の(火堂に)入ったのを見た瞬間、悲しみ煙を吐いたため、大いなる暗黒に至った。かくの如く人竜は心悦び惑乱することなく、その火堂にあってあたりに煙を吐いた。悪意を抑えることが出来ず、かの竜は火を燃やした。火界三昧に善巧なる人竜もまた、その如く輝いた。時にその夜が過ぎて、毒蛇の竜の火焰は無くなったが、しかるに(世尊の)火焰は青、黄、赤、白、深紅、水晶などの色彩があり、アンギーラサ(angirasa)の身にもまた多種の色彩があった。悲に勝れたるお方は、その刹那に毒竜を鉢に入れて、ウルヴェーラカッサパに示し給うた。(世尊の)神変神通によって信樂せる結髪外道は、身毛豎立し、守護者にこう告げた。「沙門よ、わたしは『あなたは此処に住しなさい』とあなたをこの庵で、常恒食によって招請します」。かの守護者は同意を得て、(カッサパの)庵より遠からざる或る密林に住し給うた。¹⁷⁾時にその深夜に、殊妙の容色の四大(天)王が、如来に近づき挨拶をなし、四方に立ったが、それは恰も大火聚が燃える如くであった。その夜が過ぎてから、結髪外道(カッサパ)は世尊に近づき、寂黙の王にこう言った。「大沙門よ、時が到りました。わたしは食事を準備いたしました。ゴータマよ、夜に何人がやって来てあなたに挨拶をなしたのですか」。

「カッサパよ、かの四大(天)王が近づき、浄不浄を尋ね、わが法を聴受せんとしたのである」と(世尊は言われた)。時にカッサパにかくの如き思惟があった。「この沙門は大神変、大威力を有している。しかしながらわたしが阿羅漢であるようには、まだなっていない」。時に世尊はウルヴェーラカッサパの食を食して、その密林に住し給うた。深夜に殊妙なる諸天の主宰者サツカが、前のものより勝れた光明によって林の内を照らして世尊に近づき、挨拶をなした。夜が明けるやカッサパは近づき、(世尊に)こう言った。「時が到りました。あなたの食事の準備が整いました」と。「大沙門よ、深夜に何人が来て挨拶をなし、密林の一方に立ったのですか」。カッサパよ、この三十三天の主宰者が最上の法を聴くために、わたしに近づいたのである」。時にカッサパはかくの如く思惟した。「この沙門は大神変、大威神力を有し、最上にして最尊、インドラと共なる世界の守護者である。しかしながらわたしのような阿羅漢には、まだなっていない」。世尊はカッサパの食を食して、密林に住し給うた。以上(19)に言われた方法によって、大梵天サハンパティが、法を聴くために真夜中に来たのである。日の出に到った時に、カッサパはかの仙人に近づき、「大沙門よ、時が到りました。食事の準備が整いました」と言った。「かの勝れた容色のものが、あなたに挨拶をなして一方に立ち、この林を照らしまし

たが、かれは誰のですか」。カッサパよ、この師は梵天サハンパティであり、法を聴受しようとしてわたしに近づいたのである」。時にカッサパはかくの如く思惟した。「おお、これは何と希有なることか、われわれの此界に來たりたるかの沙門は、師のブラフマンよりもっと勝れたものである。しかしながらわたしが阿羅漢であるようには、まだなっていない」。かの守護者は食事の務めをなされて、密林中に住し給うた。たとえ呵責者が言ったとしても、守護者は住せられるのである。遍熟させつつある守護者は、一千人の従者を伴っているカッサパ達三人兄弟の結髪外道を教導するためにである。それ故、冬期(の間)かの密林中にかの(世尊)は住し給うた。さて(20)守護者の悟りから九か月目のプッサ月の満月の日に、アンガ(Anga)とマガダ(Magadha)両国の住民達によって、大供儀が行われようとし、かのウルヴェーラカッサパに利益があった。その時、カッサパはかくの如く思惟した。「かの大沙門は大神変、威神力を有し殊妙にして智慧を有しているので、もしこの集会に來て、その中で変化神変を示すならば、人々(358)はかれの行為によって信仰を起して、かれの言葉をブラフマンの言葉の如く思(359)って、かれを敬い随順して恭敬するようになるであろう。またかれは月や太陽の如く(360)に世間で名声を得るであろう。わたしは利養恭敬を損い、

活動できなくなるであろう。ああできるなら明日大沙門は、来なければよいのだが」。時に³⁶¹悲心に勝れた世尊は、(ウルヴェーラカッサパの心に、このような)思念が生じた時、「かれはわたしが来ないことを欲している」と了知し給い、(密林の)居所からヒマラヤ山 (Himavant) に行つて、³⁶²かのアノータッタ池 (Anotattadaha) で身体の世話をし、³⁶³口を漱いで、マノーシラータラ (Manosilatāla) に立ち、殊妙なる紅蓮の衣と同じ色の、ニグローダの若芽をもつて内衣となし、電光の如き速さをもつて腰帯を結び、赤き毛布と同じ(色の)如来の大衣を取つて身に纏い、かの比類なきお方は光り輝き給うのである。かの³⁶⁶蜜蜂の色と同じ色の美妙なる石製の鉢を、網縵の手によつて取り、そこより跳躍して天空によつて、³⁶⁷一心の瞬間にウッタラク (Uttarakuru) に行き、夕方に行乞の行法によつて食を受領して運び、アノータッタ池の近くの高貴なるマノーシラータラに坐して、食し給うた。等至に³⁶⁹到達して、等至の樂によつて一日を過し(かの)密林に近づき給うた。日の出の時刻に、カッサパが近づいて、「時が到りました。食事の準備が整いました。」と世尊に告げた。「大沙門よ、何故に昨日はおいでにならないのかつたのですか。わたし達は『何故においでにならないのだらう』と、あなたのことを憶つておりました。わたし達は硬食の(あなたの)配分を取つて置いたのです」。高貴なるお方

(はカッサパの)総ての思念を、言葉で語られた。他方(カッサパは)、(世尊の)言葉を聞いて恐れて思念した。「ああ、この沙門は大神変、威神力を有している。何故ならば彼は自らの心を以つてわたしの心を了知しているからだ。しかしながら、わたしが阿羅漢であるようには、まだなつてはいない」。時に³⁷⁵かの世尊は、カッサパの食を食して、かの密林に住し給うた。⁽²¹⁾その時、世尊は糞掃衣を得られた。時に(世尊は)「何処でこの糞掃衣を洗うべきか」と思念し給うた。時に千の眼を有するとかの諸天の帝王サッカは、心を以つて³⁷⁷守護者の心を知り、手づから清浄なる一つの池を掘り、「世尊、さあ此処で糞掃衣をお洗い下さい」と言った。(時に世尊は)「何処に糞掃衣を擦るべきか」と思念し給うた。天帝は(世尊の)思慮を了知し、直ちに神通によつて大きな岩石を近くに置いた。そして「世尊、さあ糞掃衣を擦つて下さい」と言った。(時に世尊は)「わたしは何に捉つて水から上がるべきか」と思念された。時にカクダ樹 (Kakudha) に住む天は、(世尊の)思念されたことを了知して、かの枝を垂れて世尊に告げた。「尊師よ、世尊は(この枝に)捉つて、上がつて下さい」と。(時に世尊は)「何処に糞掃衣を曬すべきか」と思念し給うた。諸天の帝王サッカは、か(の世尊)の思念されたことを了知して、瞬間に大きな岩石を持って来て近くに置い

た。尊師よ、糞掃衣をこの（岩石）に置いて下さい」と、か（のサッカ）は言った。日の出に到った時、カッサパは近づき守護者に言った。「時が到りました。食の準備が整いました。以前はこのような池は見られなかった筈ですが、今日此処にこのような池が出現いたしました。それに此処には以前無かった筈の岩石が此処に置かれています。一体如何したことなのでしょうか。それに以前は垂れていなかった筈の枝が、今日は如何して垂れているのでしょうか。か（の世尊）は、かれに総ての原因を、詳細に話し給うた。（カッサパは）守護者の言葉を聞いて畏怖し、思念した。「この沙門は比類なき大神変、大威力を有している。だからかの諸天の帝王が（この沙門のための奉仕）をなすのであろう。しかしながら、わたしの如き阿羅漢には、かれはまだなっていない」と。か（の世尊）は、かの（カッサパの）食を食して密林に住し給うた。夜が明けた時、カッサパは世尊に近づき、その時を告げた。「大沙門よ、時が到りました。あなたの食事の準備が整いました」と。「カッサパよ、汝が先に行きなさい。わたしは今日遅れて行くであろう」と、カッサパをやって、守護者はジャンブディーパ（の名称の由来を）示すジャンブ樹の果を、そこに空中を行って取って、それより再び来て、先に到って火堂に坐し給うのである。先に到って火堂に坐したるか（の世尊）を見て、「如何なる道を来られたのか」と、か

（のカッサパ）は問うた。（世尊は）総ての事由を説明して、カッサパにかくの如く語られた。「わたしによって（もたらされた）このジャンブ樹の果は、色、香、味を具足している。もし汝が望むなら欲するだけそれを食しなさい。」「大沙門よ、わたしは十分です。あなたのみが食するに価します」。時にカッサパは、かくの如く思念した。「この大沙門は大神変、大威神力を有している。しかしながらわたしが阿羅漢であるようには、まだなっていない」。師は食の務めを果されて密林に住し給うた。夜が過ぎた時、カッサパは近づいて告げた。「時が到りました。食事の準備が整いました」。か（の世尊）は「カッサパよ）行きなさい。わたしは遅れて行くであろう」と、カッサパを（先に）遣って、守護者はジャンブディーパ（の名称の由来）を示すジャンブ樹の近くのアンバ樹の果を得給うた。先に言われた如き方法によって、対話がまたなされた。日の出の時に到って、カッサパは近づいて、守護者に言った。「時が到りました。食事の準備が整いました」。世尊は「（先に）行きなさい。わたしは遅れて行くであろう」と、カッサパを「先に）遣って、先のジャンブ樹のところに神通力によって行って、世尊はその近くのアーマラキー樹の果を得られた。そして師は（カッサパより）先に行つて、火堂に坐し給うのである。（世尊を）見て（カッサパは）問うたが、（世尊は）その総て（の事由）を詳し

く説明し給うた。か⁴⁰⁶(の世尊)は、か(のカッサパ)の食を食して、密林に住し給うた。夜が過ぎた時、言われた方法によって行って、(カッサパ)は告げた⁴⁰⁷。「時が到りました。食事の準備が整いました」。か(の世尊)は「(先に)行きなさい。わたしは遅れて(行くであろう)」と、カッサパを(先に)遣って、ジャンブ樹のところ⁴⁰⁸に神通力によって行き、その近くのハリターキー樹の果を得られた。先に言われた方法によってまた対話がなされた。守護者は食事の務めを果されて、密林に住し給うた。夜が明けて早朝、カッサパは(世尊に)近づいて告げた。時が到りました。食事の準備が整いました⁴¹¹。か(の世尊)は「(先に)行きなさい。わたしは遅れて(行くであろう)」と、カッサパを(先に)遣って、神通力によって瞬間に三十三天(Tāvātīśa)に行き、最上の色、香、味のパーリチャッタカ華を取って、先にその火堂⁴¹³に行つて坐し給うのである。(世尊を)見て(カッサパは)問うたが、(世尊は)その(総ての事由)を詳しく説明し給うた。かれは守護者の言葉を聞いて、(この如き)思念が生じた。[沙門は大神変、大威神力を有している。(何故ならば)わたしを(先に)遣って、三十三天に行き、高貴なる華を持ち来たり、そしてわたしより先に行つて火堂に坐していたからである。しかしながらわたしが阿羅漢であるようには、まだなつてはいない]。

また時にかの総ての結髪外道達は、火を供養せんと欲したが、薪を細かく裂くことが出来なかつた。その時かの結髪外道達は、かくの如く思念した。「ああ、今日われ等が薪を裂くことが出来ないのは、疑いもなくこの沙門の神変と威神力の影響によるものである」。[カッサパよ、薪は裂くべきなのか]とか(の世尊)は言われた。「大沙門よ、今日裂くべきなのです」と(カッサパは)告げた。守護者の言によって、五百の薪は直ちに裂かれた。また時に(結髪外道達は)火を供養せんと欲したが、火を燃すことが出来なかつた。時に結髪外道達は、またかくの如く思念した。「ああ、われ等が火を燃すことが出来ないのは、疑いもなくこの沙門の神変と威神力の影響によるものである」。か(の世尊)は「カッサパよ、火を燃すべきか」と言われた。「大沙門よ、今日燃すべきなのです」と(カッサパは)告げた。守護者の言によって、五百の火は直ちに一斉に燃えた。しかしながら結髪外道達は、その(火を)供養し終つても、(それを)消すことが出来なかつた。時に結髪外道達は、かくの如く思念した。「ああ、今われ等がこの(火)を消すことが出来ないのは、疑いもなく、この沙門の神変と威神力の影響によるものである」。か(の世尊)は「カッサパよ、火を消すべきであるか」と言われた。「大沙門よ、今(火を)消すべきです」と(カッサパは)告げた。守護者の言によって、直ちに五百の火は悉く消えた。

また時に結髪外道達は、寒き冬の夜、雪降る時、ネーラン
ジャラーの河で、或は沈み或は水から顔を出して、適当に
(沐浴を)行っていた。時にかの一切世間を悲愍するお方は、
神変をなしつつ五百の火爐を化作し給うた。かれ等総ての結
髪外道達は、水から上ってその場所で(火爐に)纏りついた。
その時かのカッサパに、先に述べた如き思念が(あった)。

また時に非時に大雲が、雨を降らし、あたりに大洪水が起
った。勝れたる大悲の世尊の住し給う処も、水に覆われた。

その時かの守護者に、かくの如き思念があった。「わたしは
あたりのかの水を退けて、その中の塵芥の持ち運ばれた土地
を經行しよう」。その時世尊は、悉く水を退かせて、その中の
塵芥の持ち運ばれた地を經行し給うた。その時カッサパは、か
くの如く思惟した。「この沙門は、水により運び去られるこ
とはない」と、多くの苦行者達と共に、世尊が住んでいられ
る土地に、かれは急いで舟で行った。そしてその時世尊が經
行しつつあるのを見て、告げた。「大沙門よ、あなたは如何
にして、此処におられるのか」。「カッサパよ、この通りわた
しは此処にいる」と、か(の世尊)は告げ給うた。(世尊は)
瞬間に空中に昇り、舟に乗り給うた。その時カッサパは、か
くの如く思念した。「この沙門は比類なき大神変、大威力
を有している。何故ならば水に運び去られることもなかった
からである。しかしながらわたしが阿羅漢であるようには、

まだなっていない」。その時世尊は、かくの如く思念し給
うた。「ああ此の愚人には尚久しく『この人はわたしのよう
な阿羅漢ではないであろう』との思念があるう。わたしは今
この結髪外道に、信仰心を起こさせよう」。「カッサパよ、汝
の行為によれば汝は阿羅漢ではない。また汝は阿羅漢道を具
足してもいない」と。(世尊の)言葉を聞いて、カッサパは
世尊の足の上に頭をおいて、世尊に告げた。「尊師よ、わた
しはあなた様のみ許において出家し、本日具足戒を得るであ
りましょう」と。「汝はかの五百の結髪外道達の導師であり、
上首である。カッサパよ、汝ただ一人のみでなく、かの人々
も許しを受けよ」。それ故(カッサパは)守護者の言葉を聞
いて、庵に行つてかれ等結髪外道達に呼びかけて、こう言っ
た。「おお苦行者達よ、友よ、わたしは今日大沙門の許で、梵
行を行じようと思う」。かれ等結髪外道達も思惟して、久し
からずして大いに喜び「友よ、もし沙門の許で(あなたが)
梵行を行ずるならば、われわれも総て梵行を行ずるでありま
しょう」と告げた。それ故総ての結髪外道達は毛髮、螺髻、
天秤棒、種々の火祀具、羯羊皮などを水に流して、水を渡る
姿で行つて挨拶をなし告げた。「尊師よ、われわれは守護者
の許で出家し、具足戒を得るであります。輪廻より解脱
することを(欲しています)」。その時世尊は「来たれ比丘等
よ」の言によつて語られ、「法と律は善く説かれた。汝等、

正しく苦を滅するため、梵行を行ぜよ」と(説き給うた)。

⁴⁵⁷かれ等総ての苦行者達は衣鉢を持し、雨安居の百人の長老達は、威儀を具足した。兄弟⁴⁵⁸のナディーカッサパ(Nadikassapa)と呼ばれる(結髪外道)は、総ての資具が水に運ばれて来るのを見た。(かれは)⁴⁵⁹「わが兄弟に如何なる災禍があったのだろう」と思念して、或る苦行者達を(かれの)許に遣った。「急いで行って、わが兄弟を確認しなさい」。間もなくかれは自ら、三百人の苦行者達と共に、かれの許に行つてかれに尋ねた。「カッサパよ、この如きがより勝れているのか」。

「友よ、そうだ」とか(のウルヴェーラカッサパ)は言った。

⁴⁶²その言葉を聞いて、総ての苦行者達は、急いで行って総ての資具を水に流して、そして先に言われた方法によって庵より出でて行って、清浄なる輪に飾られた師の足のひらを、頭⁴⁶⁴によって礼して「尊師よ、わたし達は、出家をし具足戒を受けるであります」と世尊に告げた。守護者の言葉により、輪廻より解脱すること(を希った)。「来たれ比丘等よ」と、か(の世尊は)手を差し出されて、語り給うた。守護者の話によって直ちに、かの者達は総て神変によって作られた衣鉢を持し、雨安居の⁴⁶⁷一百の長老と苦行者等は威儀を具足した。時にかの最も年若のガヤカッサパ(Gayakassapa)と呼ばれる者は、総て⁴⁶⁸の資具が水に運ばれて来るのを見た。そして「わが兄弟に如何なる災禍があったのだろう」と思つて、

或る苦行者達をその許に遣った。⁴⁶⁹「急いで行って、わが兄弟を確認しなさい」と。間もなくか(のガヤカッサパ)は、自ら二百人の結髪外道達と共に行つて、かれに尋ねた。「カッサパよ、この如きがより勝れているのか」。「友よ、そうだ」とか(のナディーカッサパ)は告げた。その言葉を聞いて、総ての苦行者達は急いで行って総て⁴⁷²の資具をガンガーに流して、再び来て師に最高の出家を乞うた。大牟尼は、来たれ比丘よの出家(法)によって、出家せしめ給うた。

「ウルヴェーラ行」終り。

註

(1) Giridipa は明確な地理上の島ではないのだが、仏陀来訪の折、その島を引き寄せ夜叉達を、そこに駆逐して再びもとの場所に置いたと伝えられる。(cf. Mhv, I, 30; Dpv, I, 67) 然し Geiger は Giri は高地のことであるから、夜叉達がセイロン島の内部の高地に放逐されたものと解すべきであると言ふ (Mhv. Trs., p. 4 註四)

(2) phussa 月は印度暦で寒期に属する第十月。太陽暦では十二月十六日～一月十五日頃に相当する。

(3) citta 月は印度暦の熱期の第一月で、陽暦の三月十六日～四月十五日頃に相当する。

(4) Vesākha 月は印度暦第二月。陽暦の四月十六日～五月十五日頃に相当。

(5) 以下第二一五偈までにおいて、ブッダの予言の形式をとつ

てブッダ滅後の經典編纂會議から第三結集に到り、モツガリ
プッタティッサの弟子で、アソーカ王の子マヒンダによる、
セイロンへの公式な仏教伝道に到るまでを記述している。

- (9) Dpv. V, 30-38 には、上座の徒によって排斥された大衆の
徒が、根本結集を破毀して別に結集を行ったため、上座大衆
の根本分裂が生じたことを記述している。南伝では、周知の
如く、十事をもって根本分裂の起因としている。

- (7) Dhammāsoka は Vindusāra の子で、異母兄弟等九十九
人を殺害して、主権を掌握した。南方伝によって、ブッダ入
滅の時から算えてアソーカの灌頂に到るまで二百十八年が経
過したことを説いている。

- (8) Moggaliputtatissa の最後から二番目の生は梵天の一人
であり Tissa と言った。仏法の衰退を防ぐため第二結集を
行ったアラカン達の要請を受けて、パータリプッタのニバラ
モン Moggali の子として再生した。そこで Siggava の教
導を得て出家し、教団の指導者となり、第三結集を主導し
た。(cf. Mhv. V, 191ff, 131ff; Dpv. V, 55ff; Sp. I. 35~41.)

- (9) 以下第二三五偈までは、ジャータカの因縁物語 (Nidana-
katha) のうち「近き因縁物語」(Santikenidāna) の梵天勸
請までの部分及び律蔵の大品 (Mahāvagga) 第一大難度、
五一―一三の梵天勸請縁 (Brahmayācanakathā) の部分
に相当する。

- (10) 以下第二八八偈までは、Nidānakathā の「初転法輪」の部
分及び大品の六一―四六初誦品 (paṭhamabhāṅgavāraṃ)
の終りの部分までに相当し、アージーウィカのウパカとの選

「Extended (or Cambodian) Mahāvamsa」訳註】(福田)

近の次第や五比丘への説法の状況等について記述している。
Mhv. Tika と殆んど内容的には同じだが、かなり増補され
ている。

- (11) Kāsiyura は即ち Bārāṇasi のことで、屢々そう呼ばれ
る。

- (12) asāḥa 月は印度曆第四月で、陽曆の六月十六日―七月十
五日頃に相当する。

- (13) Aññātakonḍañña はよく単に Konḍañña であったが、
世尊の初転法輪の後、世尊が「コンダンニヤは悟れり」(añ-
ñasi vata bho Konḍañña) と言ふ、それ以後 Aññāta-
kōṇḍañña と呼ばれるようになったと言ふ。(Mahāvagga I.
6-32)

- (14) Anattalakkhana-s. は、転法輪経を説いた後、世尊が五
日間にわたり五比丘に説き、この経が説かれた後に五比丘は
阿羅漢に達したと言ふ。(cf. Vinaya. I. 13, 14; Jātaka, I.
82; IV. 180; Dpv. I. 34; MA (=Majjhima Commentary)
I. 390 etc.)

- (15) 以下第三〇〇偈まではジャータカの Nidānakathā のヤサ
の帰仏、パッタヴァツガ青年の帰仏の部分及び Mahāvagga
VII. 「Yasapabbajjā」IX. Catugihipabbajjā~XIV Bhad-
davaggiyasahāyākānam vattu (賢衆友人事) の最後第二
誦品 (dutiya-kabhāṅgavāraṃ) 畢の部分に相当している。

- (16) 以下三三〇偈までは Nidānakathā の迦葉の帰仏及び大品
(Mahāvagga) 一五の「初神變」(paṭhamam pāṭihāriyam)
にあたる。

- (17) 以下三三七偈までは、大品一六「第二神変」(dutyakapāti-hariyam)の部分に相当する。
- (18) 以下第三四五偈までは大品一七「第三神変」(tatiyakapāti-hariyam)にあたる。
- (19) 以下第三五三偈までは大品一八「第四神変」(Catutthapāti-hariyam)に相当する。
- (20) 以下第三七五偈までは、大品一九「第五神変」(pañcaman-pāthariyam)に相当する。
- (21) 以下第四七二偈までは、大品二〇一〜二三に相当する部分で、ウルヴェーラカッサパ、ナデーイーカッサパ、ガヤーカッサパの三兄弟が順次ブッダに教化されていく過程を記述している。